

近世後期京都近郊村落における医師の活動実態

——山城国乙訓郡上里村大島家の事例——

尾 脇 秀 和

はじめに

近世における在方の医師の研究は、従来の医史学からの研究のほか、近年は在村蘭学からの研究、および在村知識人としての研究の一環として進められてきた。^①

在方の医師の存在形態は、時代・地域によつて一様ではないが、近世中期から後期にかけては、村落内部から医師が発生する傾向がみられるようになり、特に村役人や旧家層が、医師としての側面を帯びるようになる事例が多くみられる。そうした医師は、医療活動に従事する存在である一方、従来から村・地域とは濃厚な社会的関係を有している。在方の医師を扱う場合には、医業を営む村・地域との社会的関係を踏まえた上で、その活動の意味を考察する必要がある。^②

本稿は、近世後期から医師として活動した山城国乙訓郡上里村の大島家を対象として取り上げ、その医師的活動の展開と往診活動から、村・地域の人々との関わりについて分析する。^③また、京都近郊村落における医師の活動実態については、これまで明らかにされておらず、大島家の事例を通じて、その一端ながら明らかにしたい。

主史料として使用するのは、大島家の「日記」（以下「日記」と記す）である（表1）。天明五年（一七八五）

表1 各年の大島家「日記」

	年	執筆者	年 齢					
			直方	直良	武幸	直珍	直勢	
1	天明5年(1785)	直良	54	25				
2	6年(1786)	同	55	26				
3	7年(1787)	同	56	27				
4	8年(1788)	同	57	28				
5	寛政3年(1791)	同	60	31	1			
6	4年(1792)	同	61	32	2			
7	7年(1795)	同	64	35	5			
8	8年(1796)	同	65	36	6			
9	9年(1797)	同	66	37	7			
10	10年(1798)	同	67	38	8			
11	享和3年(1803)	同	72	43	13			
12	文化6年(1809)	同	78	49	19	2		
13	12年(1815)	武幸	84	55	25	8		
14	15年(1818)	同		58	28	11		
15	文政2年(1819)	同		59	29	12		
15	5年(1822)	同		62	32	15		
17	9年(1826)	直良・武幸		66	36	19		
18	10年(1827)	直良・武幸		67	37	20		
19	12年(1829)	直良		69	39	22		
20	天保5年(1834)	直珍		74		27		
21	10年(1839)	直珍		79		32	5	
22	13年(1842)	同		82		35	8	
23	14年(1843)	直珍		83		36	9	
24	弘化5年(1848)	直珍		88		41	14	
25	嘉永7年(1854)	同				47	20	
26	安政5年(1858)	同				51	24	
27	万延2年(1861)	直勢				54	26	

注1) 元号は改元がある場合(文化15年=文政元年等)があるが、表紙記載のままとした。

2) 天明5年～8年の日記は、寛政8年に改めて書写したとの奥書がある。

3) 文化12年は8月1日以降欠落。

4) 文政9・10年は「武幸誌」と記されているが、武幸の眼病のため、実際は直良がほぼ全て筆記している。また、天保5・14年にも直良の代筆期間が存在するほか、万延2年の日記には直珍による加筆が一部見られる。

5) 年齢は大島家文書から算出した。

〔万延二年(＝文久元年・一八六一)まで七六年間のうち、二七年分が現存している。〕

一、医療活動の背景

山城国乙訓郡上里村(現・京都市西京区大原野上里)は、行政上石見上里村として隣の石見村と一村に扱われ、村高は七六〇石余、公家・寺院・禁裏御料など、一六の領主による相給の村であった(表2)。そのため、村役人は村庄屋の他、領主ごとに株庄屋と年寄とが存在した^⑤。大島家は、代々上里村に居住しながら、正親町三条家家来

表2 石見上里村の領主

領 主	石 高	株庄屋
禁裏御所御料	11.563	甚右衛門
仙洞御所御料	23.437	同人
二ノ采女	10.	同人
善峯寺	103.66	奎兵衛
中御門家	35.	同人
富小路家	100.	忠右衛門
戒光寺	106.	勘兵衛
大炊道場聞名寺	74.6	喜兵衛
竹内家	45.8	武右衛門
持明院家	45.	庄右衛門
甘露寺家	40.5	源左衛門
因幡堂平等寺	40.111	同人
大炊御門家	34.9	仁兵衛
白川家	37.7	林右衛門
花開院	11.064	市兵衛
正親町三条家	45.	太兵衛
合計	764.335	

注 『史料 京都の歴史』3 を元に作成。
 文政9年6月時の株庄屋を参考として
 あげた。なお、同年には村庄屋にあたる
 「上里村惣代・伊助」「岩見村惣
 代・奎兵衛」もいた。(大島家文書)

として仕え、近世中期までは村役人を務めた家柄であったが、村内における社会的・経済的地位を低下させた近世後期から、医師・手習師匠として活動するようになる。

大島家が医学の知識を習得するようになった時期は定かではないが、寛延三年(一七五〇)、近江の矢守忠蔵が上里村に来住して医業を営んでいること^⑥から考えると、

寛延期の同村は無医村であり、大島家も医師的活動は行っていなかったと考えられる。矢守はその後村を去ったとみられるが、大島直恒の末子が矢守の養子となっており、この接触は医術習得の契機として少なからず作用したことも推測できよう。

具体的活動について述べる前に、医師として活動した大島家の各人物の知識の習得・修養について述べておきたい。なお、次章でも述べる通り、大島直方も医学の知識を有しているとみられるが、その習得については史料の制約から全く不明であり、ここでは大島直良以降について述べることにする(図1)。

大島直良(通称・丹治、員馬、晩年は省斎と号す)は、天明元年(一七八一)、上久世村の湯浅家から大島直方の養子となった。養子に入る以前、儒を古註学の字野明霞に学んだ武田梅龍の門下・村瀬栲亭に、医を実父の後妻の兄である東洞院四条上ル町の医師・能勢秀治に師事した^⑦。なお、実父である岡本左内にも、医の心得があったようである。大島家では毎年正月に学文始を行っているが、そこには『傷寒論』(天明五・六年)、『金匱要略』(享和三年)、『尚論篇方論』(文化一五年)、『脾胃論』(文政二年)、『済生方』(文政九年)、『格致余論』(文政一〇年)な

れた『傷寒論』の講釈へ定期的に出席している。また、同年には父直良が留守の際に代診として病家へ出向いており、医業を継承する意志を持っていたようである。しかし文政九年（一八二六）頃から眼病を患い、やがて失明、その後家督を継ぐことなく没した。

かわって大島家を継ぐことになったのは、武幸の弟直珍（幼名・慶二郎、通称・数馬）である。兄武幸と違い、京都の私塾への通学や医学修行の記事は確認できないが、医学の知識を有しているのは確かであり、天保一四年（一八四三）からは、医師としての往診活動が確認できる。ただし従来の出勤・耕作にくわえ、天保四年からは大炊道場聞名寺株庄屋も勤めており、直良ほど多くの時間を医業に割けたとは考えにくい。とはいえ父直良が病氣の際にはその治療に当たり、具体的に病状を書き留めながら対処するなど、医師としての技倆は備えていたようである。しかし安政五年（一八五八）のコレラ流行に際しては、流行の様子を書き留めてはいるものの、直珍自身が医師として特に対応したような記事はなく、また万延二年（一八六一）には「植疱瘡」（種痘）を上久世村の与次兵衛という「植疱瘡之医」から受けているが、直珍自身が種痘を施した様子はない。このような点からも、直珍は医学知識の向上より、村役人としての活動を重視していたように見受けられる。

直珍の子直勢（幼名・国之介、通称・周次郎）には、医師として活動した記事は全く見られない。直勢は手習師匠としては活動したようであるが、医師としては活動しなかったものとみられる。

二、医療活動の展開

例年通、養命丹一封ツ、村方へ年玉として賦申候、尤家数寺方用人まで六十四五軒也、別紙二家数書留候也
（天明五年正月三日条）

天明五年（一七八五）正月三日、大島家は村内に「養命丹」なる薬を配布している。「例年通」とあることから、以前から同様の配布が行われていたとみられる。やや時代は隔たるが、「日記」天保五年正月二十七日条から上里村の戸数が六三軒余と判明するので、この「六十四五軒」は上里村の全戸と思われ、村の全戸を配布対象としていたと考えられる。大島家では「伏見やニ而薬調ひ」（天明五年八月一九日条）や「僕、京都へ薬種取ニ遣す」（同年七月二十七日条）など、薬屋から薬や薬種を購入しており、「養命丹」は自家製の家伝薬であろう。こうした家伝薬の村内配布は、特に近世前期から中期にかけて村役人層にみられた行動で、村内における家格維持の手段としての恩恵的医療活動と理解されている。¹⁴医学の知識を身につけ、医師として往診を行うようになる前段階的活動といえようが、この配布を大島家が古くから行ってきたのか、大島家の地位が低下した近世中期以降、新たに始められたのかは明らかにしない。

しかし「例年通」だったはずの養命丹の村内配布は、翌天明六年（一七八六）には見られず、その後も一度としてみられない。養命丹自体、その後は「善峯寺ニ而食主実相坊・閏月坊・仙王坊へ年礼ニ参る、養命丹一包ツ、遣す」（寛政三年正月九日条）、「善峯寺へ年礼相勤、養命丹持参也」（寛政四年正月十二日条）、「野夫、善峯寺へ春礼相勤、養命丹持参」（寛政七年正月七日条）等と、次第に善峰寺への年礼の品としてしかみられなくなる。そして「予、善峯へ春礼ニ参り候…（中略）…円月坊・仙王坊・谷坊各養命丹・扇子式本ツ、持参候事」（享和三年正月九日条）という記事を最後に、以後養命丹は一度も「日記」に登場しなくなる。これは一体何を意味するのであるか。

この養命丹最後の記事が記された享和三年（一八〇三）は、直良による往診活動が活発化していった年であることに注目したい。もともと、直方も一定の往診活動を行っており、天明五・六年には「大原野村安養寺来臨、右ハ所労ニ付療治頼ニ被参候也」（天明五年六月二日条）「数馬（直方）岡新田へ療用ニ被参候所……」（同年九月二三

日条)、また寛政期にも「善峯寺ら使僧来臨、右ハ病人有之候ニ付、^(診)診察可仕旨申来る、数馬登山被致候」(寛政九年五月二八日条)など、往診の記事がみられる。天明期、直方は医薬の配布と平行して、往診活動も行っていたと考えられる。

しかし、直方による往診と、享和三年以降に直良が行うことになる往診活動には、決定的な違いがある。それは「薬礼持参之旁」(享和三年二月二九日条)の存在である。享和三年以降には、「病家之礼者アリ」(文政一〇年五月五日条)、「諸礼者有之候、又^(診)診謝之衆入来也」(文政一二年七月一五日条)、「療家礼者アリ」(文政九年九月九日条)、「療用礼者来」(弘化五年二月二九日条)等、五月五日・盆前後・九月九日・年末等の時期に、診察を受けた人々が、直接大島家へ薬礼を持参するようになるが、直方の時代には、こうした盆暮節句といった特定の時期に、往診先の人々が多数薬礼を持参するという記事が見られないのである。

直方の往診は、先に挙げた例のように、古くから付き合いのある寺院や知己などの依頼を受けて行うもので、特に善峰寺からの依頼が多くを占めている。つまり直方による往診は、ごく一部の固定した患者を対象としていたとみられ、広く村・地域の人々を対象とした直良による往診活動とは、異なる性質であったとみられるのである。また寛政期、直方は正親町三条家諸大夫が欠員となった時期、その代役としての正親町三条家の御殿に詰めて勤務している。その期間中、医師としての活動は全く出来なくなっているはずであるが、その間直良が代診を行うようなこともみられない。それは後述するような、時として往診を理由にして出勤まで断り、不在中には息子武幸が代診をする、という直良の姿勢とは明らかに異なっており、医療活動への認識の点でも相違がある。またそれは急に往診を停止しても支障が生じないほどの数しか患者を抱えていなかったことも示唆していよう。直方は同家の諸活動の中で、医療活動を特に重要視していなかったとみられる。

このようにみると、享和三年を境として「養命丹」がみられなくなるのは、施薬を主とする直方の活動から、往

診を主体とする直良の活動への移行を示していると理解できるであろう。

直良による医師としての往診活動は、「予、諸方へ療用」（享和三年正月一日条）という記事が初見で、享和三年の「日記」以降、本格的にみられるようになる。寛政二年（一七九九）〜享和二年（一八〇二）の四年間の「日記」が欠けていることもあつて、その間の事情は詳らかにできないが、この四年の間に往診活動が開始されたとみられる。それ以前、天明五年には「野田左兵衛来臨」（中略）：終日医論日暮二至る（下略）（天明五年九月二日条）と、「医論」で白熱するなど、当時は医師能勢秀治のもとでの修行を終えてからまだ数年ということもあつてか、医学に対する熱意がうかがえるが、その後の寛政期には、謡や乗馬に執心で、医師としての活動はおろか、医学に関する記事すらみられない。

往診活動活発化の背景についての考察は別稿に譲るが、ここでは往診活動による薬礼収入によって、家計を向上させようという期待があつたことに触れておきたい。

一近所諸払被致候事、当年者殊外薬納に不集ニ而大困り、凡帳面ニ而三四百目程と存候処、様々昨日より今日迄

二百目計集り候故、払方大口之分ハ盆後と申断申様ナ事ニ而御座候（下略）（文政元年七月一日四日条）

文政元年（一八一八）七月一日四日、「三四百目程」と見込んでいた薬礼が「百目計」しか集まらず「大困り」し、「払方大口之分」を盆後に回してもらつており、支払に薬礼収入を見込んでいたことがうかがえる。また、文政二年には次のように記している。

一当家勘定向ハ…（中略）…又薬納凡三百目計手当ニ而当節季相仕舞、且薬納ダケハ春払ノ手当ニ而一封も開封不致候事…（中略）…米式拾石貯へ、薬納開封不致候事、近来無之候事¹⁶

同年は例外的に貯蓄が増した年で、「薬納」（薬礼）は「三百目」程の収入があり、「開封不致」に「春払ノ手当」とすることができたと記している。しかしそれは「近来無之」ことであり、逆に例年は家計の一部として薬礼も使

用するということを意味している。

このように文政期には、薬札による収入に期待している状況がみてとれ、往診活動の活発化により、薬札収入が家計の一翼を担うものとなっていたことがわかる。

享和三年頃から始まった直良による往診活動は、「予、諸方回療後……」（文化六年八月一三日条）と、文化六年に「回療」という表現に一時期変化している。「回療」とは、あまり見かけないやや特殊な用語であるが、地域の病家を回って診療するということを強調した表現であろう。それまでの活動とは異なることを示したかったのであろう。その後、またもとの「病用」「療用」という用語に戻るが、やがて年最初の往診日には「員馬、療治恵方出初め」（文政一〇年一月二日条）、などと記されることがあり、直診の代にも「今晚療用始、半右衛門へ行」（弘化五年一月八日条）「予、療用上羽初参之事」（嘉永七年一月一七日条）などと記され、年を追って村・地域での往診活動が大島家にとって特殊なものではなく、日常的家業の一つとして定着していったとみられる。

以上のように、近世後期になると、大島家は家伝薬の配布という恩恵的医療行為から、往診活動を主とする活動へと移行した。その目的の一つには、薬札収入によって家計を向上させようという期待があった。その後、薬札収入は家計の一部として認識されるようになり、往診活動は息子武幸・直診に継承され、家業の一つとして行われるようになった。

三、往診活動

（1）往診範囲

地域への往診は、「病用」「療用」「回療」という文言で表記されるが、通常「日記」は逐一往診先を書き留めて

はいない。診療・配剤記録が別に存在していたようで、「日記」は往診について詳細な記録はせず、ただ往診の後に用向きのあつた場合に「予療用後……」「療用相勤候所……」等の形で記載されることが殆どである。そのため「日記」から全ての往診や、その詳細な内容を知ることができない。

しかし文化一二年（一八一五）の「日記」は、当時二五歳になつた武幸が、「日記」を直良から引き継いで間もない時期とみられ、「父、病用行向候」「父、寺戸村病用行向」等と、直良の往診を逐一記録している。文化一二年の「日記」は八月一日以降が欠落しているため、七月までしか判明しないが、これをもとに大島家の往診範囲について考察を加えたい。

表3は、文化一二年の往診回数を示したものである。灰方村・寺戸村・小塩村がともに二〇回を超え、ほぼ均等の回数になつており、この三ヶ村が主要な往診先であつたことがわかる。なお「父、病用」とのみ記され、村名無記載の場合も二五回と多いが、これには上里村内への往診が多く含まれていると考えられる。

往診頻度は平均月一〇日間前後であるが、六月のように二三日間に及ぶこともあれば、七月のようにわずか二日間のこともある。定期的な往診というよりは、病家へ適宜出向いてみるとみられる。往診は通常直良が行うが、留守中には武幸が代診に赴いている。一日の往診範囲は「父、寺戸村病用行向」「父、大原野・寺戸へ病用行向」といったように一、二ヶ村の場合が多いが、時には「小塩村・上羽・灰方、父病用行向」「父、小塩・灰方・石見・寺戸へ病用行向」「父、大原野村・灰方村・石見村病用行向候」など、三、四ヶ村の往診を一日で行うこともあった。

同年往診へ出かけた村々は、灰方・寺戸・小塩・大原野・石見・「西山」・長峰・上羽・杉谷・物集女・岩倉（西岩倉）である。このように、文化一二年の往診範囲は、寺戸・物集女以外、主に上里以西の西山の村々で、杉谷・岩倉のような、山中の小さな集落にまで足を運んでいる。なお、六月頃に往診先としてみえる「西山」は、こうし

表 3 文化12年の往診

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	計
往診先	回数 (日)	回数 (日)	回数 (日)	回数 (日)	回数 (日)	回数 (日)	回数 (日)	
村名無記載	1回 (5)		1回 (25)	3回 (16,19,26)	11回 (2,9,12,19,20,22,23,24,25,26,28)	9回 (1,2,4,7,9,12,20,23,28)		25
灰方村	3回 (21,23,25)	2回 (1,7)	3回 (7,10,28)	6回 (12,14,15,17,28,30)	7回 (4,7,8,10,15,17,18)	2回 (16,26)		23
寺戸村	5回 (3,18,24,26,30)	5回 (5,8,20,22,24)	1回 (28)	5回 (20,23,25,28,30)		6回 (3,13,21,24,25,26)		22
小塩村	4回 (10,12,15,18)	4回 (21,25,27,29)	4回 (1,7,9,12)	6回 (17,21,23,25,28,30)	3回 (13,15,17)			21
大原野村		4回 (21,24,26,29)	2回 (7,10)		1回 (8)			7
石見村				3回 (27,28,29)	2回 (6,8)	2回 (13,15)		7
西山						4回 (5,7,14,17)	1回 (3)	5
長峰村						4回 (3,16,24,29)		4
上羽村				2回 (17,23)			1回 (16)	3
杉谷村						3回 (3,10,29)		3
物集女村		1回 (16)						1
沼倉村						1回 (3)		1
(月あたり)日数	12日	12日	7日	15日	20日	23日	2日	

(22,26,27は武井(診) (7,9,10は武井(診) (21は武井(診)

た西山の村々という意味で使用していると思われる。

さらに往診範囲を検討するため、文化一二年以外の「日記」で往診先として記される村々をみると、岡村・長野・新田村・岡新田村・蓼平村・坂本村等が挙げられる。これらをあわせて考えると、大島家の往診範囲は上里村周辺、東は寺戸、西は「西山」、北は岡、南は石見という領域を推定できる。特に寺戸・物集女以外は西に向かう傾向がみられる。なお、向日町の懇意の人物や、実家のある上久世村の隣村下津林村で診察している例も見受けられるが、

基本的には上里村とその周辺の西山の村々、および寺戸村・物集女村という範囲が、大島家の恒常的な往診範囲と考えられる。

(2) 周辺医師との関係

大島家が前節の往診範囲を超えることは、基本的にない。大島家の往診範囲の北限である岡村、特に山陰街道沿いの町場化している檜原宿には、医師荒木氏がいること、また山陰街道以北地域へは、「日記」でも全くと言って良いほど行き来がみられず、同家の生活圏からはずれた地域であるため、往診範囲としていないことは理解できる。しかし向日町や井ノ内村のように距離的に近く、また関係も浅くない地域へ往診に向かないのは、何故だろうか。そこには周辺地域の医師の分布とその往診範囲が関係していると考えられる。

そこで、近世後期の乙訓地域における医師数を把握しておきたい。「日記」と「向日里人物志」⁽¹⁸⁾、医家の門人帳等をもとに作成したのが表4である。各史料の性格や時代的な偏りもあつて、当然網羅的なものではないが、近世後期における当該地域の医師について概観することはできよう。またこうした分布からは、大島家の往診範囲の意味もみえてくる。

この地域において、特に古くから医師として活動していたのは、向日町の上田氏である。上田氏は元和年間には向日町に居住しており、「医師并家伝薬諸国へ売弘」ことを家業としていた。⁽²⁰⁾「日記」にも上田氏が数名登場し、うち上田元林は寛政期における大島家の家庭医的存在であつたし、上田斎宮は正親町三条家で「加田周防守」の名で諸大夫を勤め、大島直良とは同じ正親町三条家の家来という関係にあつた。もつとも、諸大夫・加田周防守となつてからも薬の調査は行い、大島家は何度もその薬を受け取っている。⁽²¹⁾向日町周辺は、この上田一族の往診範囲であつたと思われる。

表4 近世後期上里村周辺地域の医師

居住地	医師名	年	史料	備考
上里村	大島家	天明5年	「日記」	大島直方、直良、武幸、直珍の三世代四名の活動が確認できる。
大原野村	桂巴	嘉永5年	「吉益家門人録」	吉益復軒門人。僧侶と思われる。
灰谷村	村上善治	文政12年	「日記」	文政12年、大島直良の西山での採薬を案内した「灰谷村医師」。
今里村	渋谷丹治	文政元年	「日本教育史資料」	文政元年～慶応2年まで寺子屋「落雷庵」を経営した医師。
	渋谷棕軒	嘉永5年	「広瀬元恭門人帳」	広瀬元恭門人。
	渋谷文平	慶応4年	「広瀬元恭門人帳」	広瀬元恭門人。
長法寺村	宇田周祐	文政8年	「向日里」	儒医の宇田一族。
	宇田雅楽	天保10年	「小森家門人帳」	小森桃塙門人。
	宇田退蔵	安政5年	「日記」	儒医宇田一族と思われる。ただし「日記」では医療行為記事なし。漢学を教授したという（「向日市史」）。
神足村	生駒大輔	寛政8年	「日記」	旧名福味大助、大島直良の紹介で生駒元禎へ養子。
	____清吾	寛政8年	「日記」	生駒大輔代診、神足村住カ（「日記」では姓を失念したのか「____清吾」と記している）
	宇田元吉	文政8年	「向日里」「小森家門人帳」	文政6年小森桃塙門人、しかし「向日里」には「医」の項には挙がらず、「発句師・詩・俳諧」の項に記載。
	宇田貞蔵	文政8年	「向日里」「海上随鷗門人帳」	文化5年海上随鷗門人、また本居大平門人。「向日里」では「和歌・連歌・儒・詩・蘭学・琵琶」の項に記載。
物集女村	土肥司馬	文政12年	「日記」	旧名市之進。直良の医書講釈を受ける。物集女村に借宅。
寺戸村	能勢元察	寛政7年	「日記」	大島直良とは謡・能をともに楽しむ友人。但し寛政期以降の「日記」には登場せず。
鶏冠井村	宇田源仲	文政8年	「日記」「向日里」	「日記」では「原中」と表記、「通和蘭究理之学」、「篤実・儒家・阿蘭陀学」の項にあがる。直良とは本の貸借をする友人。
向日町	上田玄須	寛政3年	「日記」	向日町医家上田氏。
	上田元林	寛政7年	「日記」	向日町医家上田氏。
	上田斎宮	文化12年	「日記」	向日町医家上田氏。正親町三条家諸大夫としては加田周防守と名乗る。
	上田隆吉	文政8年	「向日里」	「向日里」では「和歌・書・阿蘭陀学・文雅・琵琶」にも記載。

	嵐(吉田屋)周蔵	文政8年	「向日里」	「薬師アスル家」、「向日里」では「発句師・金原近流・儒家・詩・琵琶・俳諧」にも記載。
	並河氏	嘉永7年	「日記」	大島直勢の怪我を治療。
上植野村	村井養源	文政8年	「向日里」	「通五行配当之学」という。
	村井泰純	文政8年	「向日里」	養源の男、父同様「通五行配当之学」、「筆法家・粟田様・詩」の項にも記載。
	上田玄徳	慶応元年	(上植野区有文書)	向日町医家上田氏。小森典葉頭門人。また「水原三折門人帳」にも同名の人物がみえる。慶応元年、向日町から上植野村へ移る。
上久世村	岡本左内	天明5年	「日記」	大島直良の実父、湯浅家の人物。
	湯浅兵庫	享和3年	「日記」	親類、直良の実兄弟カ
	湯浅左内	嘉永7年	「日記」	親類、大島家へ「蘭引使用之事頼」に来る。
	村岡主一郎	文政9年	「日記」	「上久世村ニ借宅相構医業渡世」、もとは「鳥羽村(ママ)」住だが大借りの為に移住。
	与次兵衛	万延2年	「日記」	「植疱瘡之医」、大島家は彼から種痘を受ける。
下久世村	河奈辺恒斎	天明5年	「日記」	天明期における大島家の家庭医的存在。
塚原村	岡本良造	慶応3年	「日本教育史資料」	慶応3～4年まで寺子屋も経営した医師。
岡村(榎原)	岡田才造	文化5年	「海上随鷗門人帳」	
	小嶋喜内	文政12年	「日記」	榎原宇治井に住。柳原家出入。土肥司馬と知己、「医にも志し、医家へ養子被行度由」。
	荒木貫介	文政12年	「日記」	小嶋喜内の養子先として名が上がる医師。
下鳥羽村	村岡良輔	寛政9年	「日記」	親類、もと村若と称したが、寛政8年7月に村岡と改姓。
竹田村	小児医者	寛政9年	「日記」	大島亀五郎が診察を受ける。
西岡	大橋大進	文化5年	「海上随鷗門人帳」	海上随鷗門人
	大橋済司	天保3年	「小森家門人帳」	小森桃塙門人
	宇田隆次郎	文化11年	「小森家門人帳」	小森桃塙門人

注1)「日記」=「大島家日記」、「向日里」=「向日里人物志」

2)「日記」の場合初出生を記した。

3)「西岡」は広域地名「西岡郷」

また元禄期に鶏冠井村に來住した宇田氏も、医師として活動した一族であつた。⁽²³⁾分家が神足村・長法寺村にあり、井ノ内以南の地域では、この宇田氏が医師として活動していたと思われる。なお、直良は鶏冠井村の宇田源仲(「日記」では「原中」と表記)とは本の貸し借りなどを行う友人でもあつた。今里村では手習師匠として活動した医師渋谷氏がおり、さらに神足村では大島氏と關係の深かつた生駒氏があつた。「日記」に登場する生駒大輔はもと福味大助といい、直良の仲介で生駒元禎の養子となつた人物である。上植野村では村井氏も医業を行つていたとみられる。また北西の上久世村の湯浅氏も、既に述べたとおり直良の実家であり、大島家同様医師活動も行つていたとみられる。このように、向日町やその周辺、および井ノ内村以南の地域では、大島家の活動以前から多くの医師が存在し、活動していた。

このような医師たちが、それぞれ自身の居住地を中心にして往診活動を行つていたとすれば、享和頃から本格的な往診活動を始める大島家が、彼らの往診範圍を浸食して競合するような方向に進まず、従来医師のいない地域へと向かうのは当然であろう。

また寺戸村には、寛政期まで直良と譚や能を共に楽しみ、特に懇意であつた能勢元素がいた。能勢は大島家へも往診に訪れており、寺戸村周辺を往診範圍として活動していたと推測されるが、享和三年の「日記」以降には登場しなくなる。死去したか、他所へ移つたと考えられる。直良が寺戸村や物集女村を往診先としているのは、能勢がいなくなったあと、その往診先を引き継いだという可能性が十分に考えられよう。

このような事情もあつて、寺戸・物集女以外の大島家の往診範圍は、あまり医師のいない西山諸村へと向かつていったと思われるが、西山方面にも少ないながら医師は存在していた。灰谷村には、文政一二年(一八二九)に直良が西山へ採薬に出かけた時、周辺の案内を依頼した灰谷村医師・村上善治がいる。直良が案内を頼むほどであるから、新参の医師ではなく、西山の地理に通じた人物と思われる。なお、彼の存在のためか、大島家の灰谷村への

往診は確認できないが、採薬の案内を依頼していることから、往診範囲が重なるといって特に競合したような様子は無い。

このように周辺地域では、大島家以外にも医師が多く存在しており、それぞれが居住地周辺を中心にしてある程度決まった往診範囲を持っていたと考えられる。しかしこの地域では公儀による医師への規制も、医師たちの組織化⁽²³⁾といった動向も見られないことから、往診範囲は医師仲間のような組織的決定や合意によって設定されたものではなく、各医師が自村を中心とした周辺地域で往診範囲を形成していたと考えられる。

大島家の場合を見ても、表4に挙げた地域医師たち全てと関係を有していたわけではない。たとえば、宇田源仲との付き合いはあっても、同時代の宇田貞蔵との交流は「日記」にはみられず、上田一族も表4に挙げた以外にも存在するようであるが、「日記」から交際が確認できるのは玄須・元林・斎宮の三名だけである。しかし「日記」からはあまり医師同士の交流が確認できないとはいえ、養子の仲介等を行っていることなどを考えると、一定の関係を有していたとみられ、往診範囲にも医師間で暗黙の了解があったものと思われる。

(3) 往診活動の状況

往診活動の具体的状況を、享和三年（一八〇三）の「日記」からみてみたい。

享和三年時の大島家は、直良四三歳、父直方七二歳、息子武幸一三歳であった。この年も月一回程度の正親町三条家への出勤、家作地の耕作、寺子屋等の諸活動を例年通り行っている。そうした状況の下、同年は京都周辺で麻疹が大流行し、直良はその治療に奔走することになった。

麻疹の流行は「日記」の四月一〇日に「去月下旬より療用闇シ、此節麻疹流行大ニ繁多也」とはじめて記され、三月下旬から始まった。四月一五日には「予終日療用相勤、尤当村麻疹大ニ流行、其外村々瘟疫麻疹流行候也」と、

村内のみならず周辺地域で麻疹が猛威を奮い、直良は終日往診に奔走している。同月二十八日には「岩三郎（武幸）今日も麻疹発熱」、五月一〇日には「於久・小十郎麻疹発熱」と、直良の息子と娘も麻疹に罹っている。流行は六月中旬頃まで続き、薬礼納の七月一四日には次のように記されている。

当春より療用開敷、薬数貳千八百計調合候故、当季謝礼之人々大ニ多シ、先以重畳之至、坂本・長峯・灰方辺ハいつニ而も益後ニ而未來候、尤当季春比ハ麻疹大ニ流行、此度之麻ハ京都近国ハ遁るゝ者一人も無之候由、当村ニ而一兩人免レ候由也、未聞之流行ト承候、予四月中旬より六月中旬迄ハ大ニ世話敷、夫故野辺之働等ハ見廻りも出来不申候故、吉兵衛ニあてかい与介等助力いたし植中等も仕舞申候事也

この麻疹流行に当って、自村と地域の村々で「薬数貳千八百計」もの薬を調合し、それだけに「謝礼之人々大ニ多」かった。薬礼はその後、九月九日に「諸方薬礼少々集る」、年末にも「（一二月）廿六七日比ハ薬礼持参之旁、今日迄連々と入来」している。また同年八月には息子小十郎が病死しており、その治療も行わねばならず、さらに多忙を極めた。八月八日には親類村岡氏の頼母子を「予療用ニ差支、且又小十郎所労故」として、往診と息子の病を理由にして断っている。さらに往診で多忙となると、自家の耕作へその皺寄せが行くことになり、「四月中旬より六月中旬迄ハ大ニ世話敷、夫故野辺之働等ハ見廻りも出来不申」という状況になっている。麻疹流行が収まった後も「与介頼ミ内木戸坪町刈始、其外わら揚ケ諸事、予療用ハ罷帰リ手伝候也」など、往診後農耕に従事している。もつとも、このように往診活動で多忙となった大島家へ、「清右衛門、子園田を掣申候、是ハ所労之砌世話ニ成候恩謝之由也」（九月一九日条、「子園」は村内の字名）と、「所労の砌世話ニ成候恩謝」として耕作の手伝いにやってくるものもあった。

往診は、麻疹流行の時にとどまらず、常にさまざまな家業や用事のなかで行われている。「予病用仕廻、午より上京」（文化六年三月二十八日条）、「予寺戸・物集女廻療、夫ハ京都へ罷出、清水氏へ参り夫ハ出勤」（同年一二月二

六日条) というように、往診後に上京、出勤前に往診ということもあり、「予回療後、申刻比方与介方へ頼母子手伝へ行」(同年一二月二五日条)、「当家孫兵衛ニ而俄二年志レ興行餅搗、予回療黄昏ニ帰リ候而出席」(同年一二月一日条) など、往診の前後に村での行事に出席するなど、様々な用事をこなしており、医師としての活動が、村・地域での日常生活の付き合いの中で行われている。特に直良の場合は、往診活動を優先している場合が多い。文政一二年五月頃に「疫症流行」した際、「員馬、療用繁也」と多忙となると、六月一日の村の伊勢講も「療用繁多之故」不参とし、また文化六年(一八〇九)には正親町三条家が光明寺参詣の際、大島家に立寄っているが、「予、岡村へ病用ニ付、御断申上未前刻方罷出候事」(文化六年三月二二日条) と、主人の接待より地域の往診を優先している。また武幸が成長して出勤もできるようになると、「父、病用有之難致出京候故、予(武幸)参 殿候」(文政元年八月一五日条) と、出勤を武幸にまかせて医師としての活動を優先する事例もみられるようになる。

このような往診活動は、人々に医師による医療を日常的に受けけるという意識を生じさせたと思われる。例えば「今晚灰方村病家方二遍起され終夜寝す」(文化六年六月一四日条) という記述からは、地域における身近な医師として周囲から認識されていることを示している。これは大島家が旧家であり村役人層として、施薬を主とする恩恵的な医療を行っていた時代には、考えられなかった状況であろう。大島家による往診活動の活発化は、村・地域における医師への需要をも創出したといえよう。さらに患者が自身の手に負えない場合には、京都の医師を紹介していることもある。「一、西町嘉兵衛義所旁ニ付、父療治候得共不宜候故、予之師家ニ而候和田八郎方へ頼度由被申、則予方書面付候事」(文政二年一〇月二六日条) とあり、村内西町の嘉兵衛に療治を行っていたが、「不宜」ということで、武幸の師家である京都の和田八郎へ依頼したいということで紹介状を認め、京都の医師による診察の仲介も行っている。

こうした往診活動は、村・地域にとつては、医療環境の充実という効果をもたらし、同時に大島家にとつては

村・地域での医師として存在感を示すことにもなったものと思われる。

(4) 「療用之序」の交流

「療用之序」として記される、往診先や往復途次での行動にも注目してみたい。

往診の行き帰りでは、上久世村の親類湯浅氏へ立ち寄る記事が特に多いが、他にも「員馬、療用之序ニ大原野中沢丹後守へ尋問申候……」（文政九年一月一三日条）など知己への訪問、「員馬、大原野療用之序、読史余論三冊、丸屋伊兵衛方へ返却候事」（文政一〇年一月八日条）と借用した本の返却などを行っている。「日記」の記事に見える以上に、往診の際には村・地域の人々と様々な交流を持ったものと思われる。

例えば、次のような事例も見受けられる。

一 当家此度宜敷小兒有之候ハ、相談も致し度存心之處、先達父療用ニ寺戸村へ行向ひ候処、療事先ニて噂有之候故、帰り予へ相談もいたし候処、皆々打寄大躰宜敷事故及相談ニ候積リニ相極、又々療用序ニ先方被頼候処、世話人寺戸村藤右衛門肥トクイ方被頼居候故、先々其方へ可尋旨被申候、尤里元ハ御池屋敷ノ同心ナリ、且又小兒ハ女子ニて昨春出生致し候由也、先方も田舎之郷士カ又ハ^{堅キ}百性カ、右様之シカリトシタ処ヲ^望臨居候趣也、夫故世話人被申候ニハ、当家ナドハ先方之^望臨居候故、早速熟談ニ相成候ト被申候、夫より段々父療用序ニハ藤右衛門方セリ込被頼候……（下略）（「日記」天保五年六月二三日条）

天保五年（一八三四）六月、当時大島家では、「兼而大嶋より別レ之家老軒拵度」（同月二四日条）という考えがあり、養子を探していた。直良が寺戸村へ往診に行ったところ、療事先で偶然候補となりうる養子の情報を得た。それは寺戸村の藤右衛門が、京都の「肥トクイ」から頼まれていた話で、「小兒」の里元は「御池屋敷ノ同心」であつた。直良はこの情報を持ち帰り、直珍と相談したところ、この養子縁組を成立させる考えに決まり、直良は

「又々療用序二」話を進めてくれるよう依頼、その後も「段々父療用序二ハ藤右衛門方セリ込」んで頼んだという。縁談話は順調に進んだかにみえたが、二四日に「今四五日之内ニハ、先方より当村へ聞合ニ来候由也」とあるのを最後に、以後何らの関連記事を見いだせない。当初喜んでいた大島家でも、「与力ナレハ拾分二候へ共、同心タケ不足二候」（同日条）などと不満も記しているのので、結果的にこの養子縁組は不首尾に終わったとみられる。しかし往診を通じて様々な情報を得、交流の機会を創出したことを示す一つの事例ではあろう。

さらに往診先では、様々な村・地域の問題について談じることもあった。「一、父今朝病用ニ罷出候、庄屋仲ま与兵衛方罷居候而招キ候故、父立寄候、奎兵衛申二者、六右衛門義……」（文政五年九月二〇日条）は、当時の村方騒動「六右衛門一件」について談じ、文政九年の「員馬、村役伊介へ療用ニ行候所、伊介はなし被申候ニハ、姨田川筋之事……」（文政九年三月二五日条）、「員馬、林右衛門方へ病用ニ行候所、林右衛門演説ニハ、明日ハ杭木買ニ各々……」（文政九年八月十日条）などは、村役人の伊介や林右衛門のもとへ往診に行った際、当時洪水で破損した小畑（姨田）川側沿の堤防普請について談じ、情報を得ている。こうしたやりとりからは、大島家が医師である以前に村落共同体の構成員であるという立場を示すものであろう。

その他、往診は村・地域にとつて、重要な情報を得る機会ともなった。雨が少なかった文政一二年五月一四日には、「……療用罷出候而承候所、灰方・上羽辺も植付も難出来由噂ニ候也」という他村の情報を得、天保の上知令の際には「予（直珍）、新田村療用、伝聞、小堀支配之天領者、此度取上大坂支配ニ相成候由也、今日長の新田村抔天領之处弥相違無之、則儉地改見分有之候……（中略）……予、今日療用則庄屋善藏方へ立寄候处、右之由被噂大ニ困り被居候、此辺も禁仙御料如何、小堀支配者右之改来候哉、其程も知レ不申……（下略）」（天保一四年八月晦日条）といった、周辺地域や自村に関わる上知令についての情報を往診の立寄先で得ている。

このように往診は地域における情報の獲得、交換の機会ともなっていた。さらには大島家の交流範囲をも拡大す

ることになったと思われる。「日記」には伝聞・噂の記事を多く散見できるが、こうした情報は京都への出勤時のほか、こうした往診先で得た情報も少なくないであろう。安政五年のコレラ流行に際しては「上羽村之人大坂親類へ葬式ニ参り一昨日帰り、其晩より発シ昨朝死去候由」（安政五年九月二日条）「近村ニも両三人有之候」（同月一四日条）といった、村やその周辺地域の情報などは、往診先やその途次で入手した情報も多かったと思われる。また知りえた情報を他の往診先で話すことで、結果的にそれを伝播するという役割も果たすことになったであろう。そうした意味で、往診活動は情報の獲得・伝播という側面をも果たしていたと考えられる。

むすびにかえて

以上、大島家による医師としての活動の展開と具体的様相から、村・地域の人々との関わりについて分析し、京都近郊村落における医師の活動実態の一端を明らかにした。

近世後期、大島家は施薬中心の活動から、往診活動へと進展させた。それは薬札収入という経済的利益をもたらし、やがて家計の一部として認識されるまでになった。村・地域にとつては医療的充実をもたらし、大島家にとつては村・地域において、医師としての存在感を示すことにもなった。また、大島家の往診範囲について分析し、それが周辺他医との関係の中で形成されていたことをみた。往診活動の状況からは、大島家が出勤や村落共同体の様々な活動のなかで往診活動を成立させており、医師である前に、村落共同体の構成員という立場が色濃く表れていた。そして「療用之序」の往診先・往診途次での交流は、情報の獲得・伝播の機会ともなっていた。

本稿は、大島家の医師的側面のみを取り扱い、以上のような実態の分析に止めたが、では、大島家のような村役人層が、何故医師としての側面を帯びるようになるのか。医師活動を行うことにどのような意味があるのか。そこ

に従来からの村・地域での社会的関係は、どのように関連しているのか。こうした点について考察する必要があるが、それは別稿での課題としたい。

註

(1) 田崎哲郎『在村の蘭学』（名著出版、一九八五）、青木歳幸『在村蘭学の研究』（思文閣出版、一九九八）、横田冬彦「近世村落社会における〈知〉の問題」(『ヒストリア』一五九、一九九八)等。また、近世における医療実態への関心から医師を考察した海原亮「近世医療の社会史」(吉川弘文館、二〇〇七)等がある。

(2) 村役人層の医師としての活動を具体的に扱った研究としては、菅野則子『江戸の村医者』（新日本出版社、二〇〇三）、同「地域文化のあり方―谷保の本田家を中心に―」(日本海地域史研究会『日本海地域史研究』第一三集、一九九六)等がある。

(3) 往診範囲やその配剤については、土井作治「近世後期における医療思想の基盤」(Ⅰ)(Ⅱ)―安芸国山県郡大朝村保生堂の場合―(『実学史研究』Ⅵ、Ⅶ、思文閣出版、一九九〇・九一)が特に精緻な研究としてあげられるほか、細野健太郎「近世後期の地域医療と蘭学―在村医小室家の医業を中心に―」(『埼玉地方史』第四三号、二〇〇〇)も武蔵国の小室家を取り上げて、その往診範囲について明らかにしているが、従来往診範囲や地域での医療活動の実態についての研究は必ずしも豊富ではない。

い。

(4) 京都市大島直良家文書。大島直良氏所蔵。本稿では、長岡京市立図書館所蔵の紙焼写真、および京都市歴史資料館紙焼写真を使用した。縦帳で一冊三〇丁―一〇〇丁程度で平均六〇丁余、裏表紙に「直良記」「武幸誌」と、その年の記録者の名が記されている。記録者は大島直良、その子武幸・直珍、直珍の子直勢の三世代四名に亘っている。文化一二年の「日記」が八月一日以降欠落している以外は、各冊元日〜大晦日までの一年分である。その内容は、内題を「家記」としていることから分かるように、主に大島家の出来事全般、及び上里村内の動向が中心となっている。特に医師・手習師匠としての活動記事について豊富に記録されたという史料ではないが、当時の上里村とその周辺地域の様子を知ることの出来る好史料であるといえよう。なお、明治九年の「日記」も現存するが、時代がやや隔たっていることから、考察の対象からは外してある。この明治九年の「日記」は過去の「日記」の体裁を踏襲しているが、無記事の日が多く、四月一四日で完全に中絶している。大島家の「日記」については、長谷川澄夫「京都近郊一郷士の生活―天明五年「大島家日記」より―」(中山修一先生喜寿記念事業

会編『長岡京文化叢論Ⅱ』、一九九二）が天明五年分のみではあるが大島家の多様な活動の一端を紹介している。また天明五年の分のみだが「天明五年「大島家日記」」

（乙訓の文化遺産を守る会『乙訓文化遺産』同、8・9号・二〇〇一・〇二）として一部翻刻もある。他に天明七・八年「日記」を抄出・紹介した平栄一郎・井ヶ田良治「大島家の『日記』について―天明七・八年の記事の紹介―」（乙訓の文化遺産を守る会『乙訓文化遺産』7号・一九七二）があるが、大島家の「日記」を利用した研究論文は見当たらない。なお、以下で引用するその他大島家文書の文書番号は『京都市歴史資料館紙焼写真史料仮目録―西京区―』によった。

- （5） 近世中期、上里村と石見村は本枝をめぐって公訴となり、延享元年（一七四四）に以後一村扱いとすべき旨が京都町奉行所から申し渡された（大島家文書A1）。但しその後も別村としての意識は強く残っている。天明七年（一七八七）以前には、小野元右衛門家が数代にわたり村庄屋を世襲していたが、「元右衛門一件」と呼ばれる村方騒動によって天明七年に元右衛門が出走・闕所となつて以降、株庄屋を勤める村役人層が一年々数年ごとに交替で勤め、石見・上里それぞれから惣代（村庄屋）が置かれるようになったようで、訴訟の際には「上里村惣代伊助（印）・岩見村惣代李兵衛（印）」（大島家文書C21）などと連署している。

- （6） 天保三年「大嶋氏家記」（大島家文書K1）。大島直良

が自家の文書をもとにして同家の歴史を編年体で編纂したものである。

- （7） 前註「大嶋氏家記」

- （8） 『施薬院解男體図巻』は、寛政一〇年（一七八九）二月一三日、施薬院三雲環善と山脇東海が主催した解剖の記録で、京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史本文編』（思文閣出版、一九八〇）は、伝本の所在を六か所掲載し、「大島直良氏蔵」は第六番目として挙げられている。但し同書は「画は湯浅良臈」としているが「湯浅良勝」の誤り、さらに「大島家では医師になったのはこの人（直良、引用者註）のみであった」と記すが、これも本稿で述べた通り、父直方、子の武幸・直珍も医療活動を行っており、正しくない。

- （9） 「日記」嘉永七年三月九日条には「湯浅左内来臨、蘭引借用之事頼二付遣候事」とみえ、親類湯浅氏に蘭引を貸している記事も見える。

- （10） 遠藤正治「読書会物産会について」（実学資料研究会編『実学史研究』Ⅱ、思文閣出版、一九八五）

- （11） 註8の「湯浅良勝」と同一人物と見られる。

- （12） 文化一二年「日記」では、単に「和田先生」とのみ記されているが、「日記」文政二年一〇月二六日条に「予（武幸）之師家ニ而候和田八郎」とみえる。和田八郎は文政五年版『平安人物志』医家の項に「和田鉉 字士貫号謙所、烏丸三条北」 和田八郎」とみえている。また同書文化十年版には「和田哲 字哲郎号握虎、烏丸三条

北 和田泰仲」とあり、和田泰仲(中)は文化十二年十二月に没しているので(日本古典全集刊行会『地下家伝三』、一九四二)、八郎はその息子であろう。

(13) 天保一三年・弘化五年「日記」。

(14) 前掲『在村の蘭学』、『近世医療の社会史』等。

(15) なお、「日記」や大島家文書の帳面類は、包紙の紙背を一部使用しており、その中には「御薬礼 利右衛門」、「御薬礼 寺戸藤右衛門」、「御薬料御祝儀」などと記された、薬礼の包紙が多く含まれている。多くの人々からこうした形で薬礼を受け取っていたことが確認できる。活用は難しいが、付記しておきたい。

(16) 文政一二年「日記」巻末「当年諸物直段并ニ当家勘定 hands 当テ、又諸方之変事等余紙任有之是を誌し置候事」

(17) 現存する「日記」をみると(表1参照)、大島直良が「日記」を書きはじめた年齢は二五歳(天明五)で、以降の各筆記者の「日記」初年度の年齢を見ると、武幸が二五歳(文化一二)、直珍が二五歳(天保五)、直勢が二六歳(万延二)である。特に直勢は二四歳の時(安政五)には「日記」を書いていないが、二六歳(万延二)になると「日記」を書いている。直良による「日記」の開始以降、二五歳頃に「日記」を引き継ぐのが、一つの慣例となっていたとみられる。

(18) 向日市鳥羽屋文書。文政八年成立。文政期の向日町周辺における学芸人名簿で、「平安人物誌」の体裁を真似て、仲間内での遊び心から作られたものといわれる。な

お、「向日市史」史料編(一九八八)に翻刻が掲載されている。

(19) 調査対象とした医家門人帳とその出典は以下の通り。

「二世芸叟先生門人籍」(竹下喜久男『近世の学びと遊び』、二〇〇四)、「山脇東洋門人帳」(「山脇門人帳」)「養寿院玄冲門人録(山脇家門人帳)」(「伊良子家門人帳」)「荻野元凱門下姓名録」(「賀川門籍」)「社盟録(海上随鷗門人帳)」(「小森家門人帳」)「受業生姓名籍(百々家門人帳)」(「探領術伝授姓名録(水原三折門人帳)」)「時習堂弟子籍(広瀬元恭門人帳)」(「櫻園先生門籍(小石元瑞門人帳)」(以上、京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史資料篇』、一九八〇)、平野満「吉田長淑 蘭馨堂門人の拡がり」(愛知大学総合郷土研究所『近世の地方文化』、一九九二)、高橋克伸校訂『華岡家所蔵「門人録」翻刻資料」(『国立歴史民俗博物館研究報告第一一六集 地域蘭学の総合的研究』、町泉寿郎「吉益家門人録」(二) (四) (『日本医史学雑誌』第四七巻第一・二・四号、第四八巻第二号、二〇〇一〜〇三)、梶谷光弘「達生園門生録 附醇生庵探領伝授録」(『日本医史学雑誌』第四八巻第二号、二〇〇二)、「適々斎塾姓名録」(緒方富雄著『緒方洪庵伝』、一九四二)、古西義麿「緒方郁蔵と独笑軒塾」(『日本洋学史の研究IV』一九七七)、田崎哲郎「曲直瀬家門人帳」(『啓迪』第一九号 二〇〇一)、森納「藤林普山とその子孫、門人録」(『日本医史学雑誌』第三八巻第四号、一九九二)、八木淳夫「初代

養寿院山脇玄心とその門人達の伝記に関する新知見

(『啓迪』第二七号、一九九九)

(20) 元和二年「向日町上之町銘々渡世帳」(『向日市史』史料編、一九八八)

(21) 「日記」文政五年二月二〇条「加田防州に散葉三ふく・丸巻廻り分来候事」など。

(22) 『長岡京市史 本文編二』(一九九七)、第二章第三節。岩本伸二「幕末期「在村医」の組織化への動向―美作

津山の場合―」(『岡山県史研究』四号、一九八二)、塚

本学『都会と田舎』(平凡社、一九九二)、大藤修『近世の村と生活文化』(吉川弘文館、二〇〇二)等。

〔付記〕史料の使用・閲覧にあたっては、大島直良氏、長岡京市立図書館・京都市歴史資料館・向日市文化資料館には大変お世話になった。末尾ながらここに謝意を表したい。なお本稿は、修士論文の一部をもとにして執筆したものである。